

中学校保健体育科授業参観後の感想文の内容分析の試み —養護教諭特別別科学生を対象として—

齊藤 ふくみ*・星田 正治**・宮腰 由紀子***・
津島 ひろ江***・市村 國夫*

An Attempt to Analyze the Contents of Reports on Junior High School
Health and Physical Education Classroom Observations for Yogo Teachers in the Special Course

Fukumi SAITO and Seiji HOSHIDA and Yukio MIYAKOSHI and
Hiroe TUSHIMA and Kunio ICHIMURA

はじめに

養護教諭特別別科（以下別科とする）の養成教育については、これまで日本教育大学協会全国養護部門研究委員会が、四年制の養護教諭養成課程および別科学生（ならびに卒業生・修了生）を対象とした質問紙調査を行い、別科の長所として「学習意欲や目的意識がある」こと、一方短所として「一年間の短さ・慌ただしさ」「教育に関する授業科目、教育に関する知識・技術に関する不足」を指摘している¹⁾。そのような中で、平成10年に「教育職員免許法の一部を改正する法律等について 附則第15項²⁾」において、養護教諭の免許状を有する者（三年以上養護教諭として勤務したことがある者に限る。）で養護教諭として勤務している者は、保健の教科の領域に係る事項の教授を担当する教諭又は講師となることができるようになった。このことから、従前にも増して養護教諭の教科指導力、教育力が要請されている。

本別科において授業を行う力量形成のための指導は、前期において「学校保健Ⅰ（15回）」の中で10回を設定して行っている。表1は模擬授業に関わる部分を抜粋したものである。1～3回は保健科教育の基礎知識、授業の基本的条件、学習指導要領、学習指導案の作成等をビデオ鑑賞を盛り込んで行っている。その後班分けを行い4回を使って小学校の教科書に基づいて模擬授業を実施している。さらに外来講師により講演と演習を行っている。しかし、こ

れらの授業のみでは、実際の養護実習の中で、学生が授業および研究授業を行うには十分な事前指導がなされているとは思われない。これまで本別科では、中学校1日訪問実習での保健指導体験³⁾や中学校授業実践実習⁴⁾などを行ってきた。これらの成果を踏まえながら、本年度は、中学校授業実践実習に換えて附属中学校での保健体育科授業を学生に参観させた。一般に教育実習は、見学実習—授業実践—研究授業という段階を踏む⁵⁾とされる。昨年まで第一段階の見学実習が十分設定されていなかった。そこで養護実習前に学校現場の教師が行う授業を直に見学する実習を試みた。本研究は、この試みが学生にどのような影響を与えたのか、その効果を捉えることを目的として、授業参観後に記述された感想文を内容分析により検討したので、その結果を報告する。

対象および方法

対象は平成17年4月に本別科に入学した31名の学生である。授業参観の概要は、平成17年6月17日(金)第5校時1年3組保健体育科授業、単元名「心身の発達と心の健康—性とどう向き合うか—」；授業者星田正治氏である。

授業参観に当たっての留意事項として、観察のポイント(資料1)を提示した。内容は、「立つ位置・姿勢」「声の大きさ・話す速さ」「表情・視線の在り方」「発問の仕方」「教材の活用・提示の仕方」の5項目および「全体を通して」である。

感想文は、B5用紙1枚に自由記述するよう指示し、授業参観後数日中の提出を求めた。倫理的配慮として、学生に対して研究の目的・主旨を説明し同意を得た。方法は、テキストマイニングによる内容分析手法⁶⁾を用いた。分析ツールは、SPSS Text Mining for Clementine 8.1(以下TMCとする)であ

* 熊本大学養護教諭特別別科

** 熊本大学教育学部附属中学校

*** 広島大学大学院保健学科

表1 「学校保健I」の授業内容（模擬授業に関わる部分抜粋）

回数	内容	構成
1	保健科教育の基礎知識、ビデオ鑑賞	保健学習、保健指導、授業の位置づけ、ビデオ鑑賞（養護実習における研究授業①）
2	授業の基本的条件、ビデオ鑑賞	授業の構成要素（目標、内容、方法、手段）、ビデオ鑑賞（模擬授業）
3	学習指導要領、学習指導案、ビデオ鑑賞	学習指導要領、学習指導案の構成、ビデオ鑑賞（養護実習における研究授業②）
4	模擬授業①～4班	単元「けんこうな生活」～4題材、合評会
5	模擬授業②～3班	単元「育ちゆくわたし」～3題材、合評会
6	附属中学校保健科授業参観	心身の発達と健康【性とどう向き合うか】、レポート（感想文）提出
7	模擬授業③～4班	単元「けがの防止」～4題材、合評会
8	模擬授業④～4班	単元「心と健康」～4題材、合評会
9	学習指導案作成	単元「病気の予防」～6題材から各自一つ選択
10	特別講演（外来講師）	健康教育の現状と課題、学習指導案作成（演習）

資料1 授業観察のポイント

観察のポイント	気づいたこと
立つ位置・姿勢	
声の大きさ・話す速さ	
表情・視線の在り方	
発問の仕方	
教材の活用・提示の仕方	
全体を通して	

※熊本大学教育学部附属中学校：「教育実習の実際」（2002）p.39の表を一部改変

る。分析の手順は、図1のとおりである。なお、「フラグを立てる」とは、テキスト化した文章のクリーニングを行い、形態素解析、分かち書き処理をした後、対象者各人が、抽出された語句を文章に記述しているかどうかを示している。0、1で表現し、1ならばその語句を文章に含む、0ならば含んでい

ないことを意味する?。このフラグ化は、その後の種々の解析の基礎となるものである。

結 果

1. 形態素解析の結果

31名の学生の感想文を、文の始まりから句点「。」

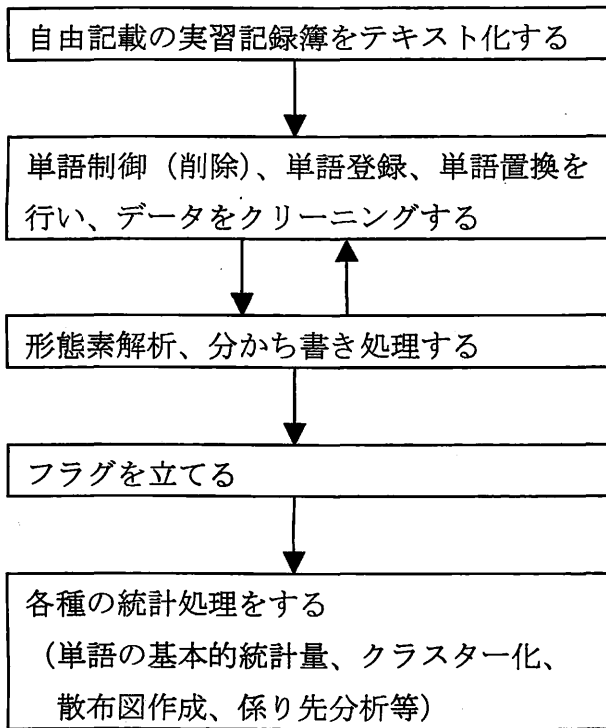


図1 内容分析の手順

までを一文として集計したところ、全部で425文であった。一人平均13.71文であった。425文をTMCを通して形態素解析した結果、5852個の単語に分割された。1文は平均13.8個の単語で構成されていた。主要語末尾品詞の構成は、「思う」「する」「考える」等の『動詞-自立』が1738度数(29.7%)、「生徒」「教師」「自分」等の『名詞-一般』が1411度数(24.11%)、「授業」「意見」「反応」等の『名詞-サ変接続』が522度数(8.92%)等40品詞に分割された。

2. 出現頻度の高い変換後主要語

分類された品詞の中から、動詞の他名詞に着目して分析した。ここでは、『動詞-自立』『名詞-一般』『名詞-サ変接続』『名詞-形容動詞接続』(「大切」「大事」「上手」等)『名詞-代名詞-一般』(「私」「それ」「何」等)の5品詞を指定して出現頻度の高い語句を抽出した(図2)。最も高かったのは「生徒」(221度数; 5.6%)であった。次いで「授業」(206度数; 5.22%)、「思う」(170度数; 4.31%)、「する」(89度数; 2.26%)、「教師」(85度数; 2.15%)、「考える」(70度数; 1.77%)、「感じる」(69度数; 1.75%)等が続いた。名詞では「生徒」「授業」「教師」「意見」がキーワードになっていた。動詞では「思う」「する」「考える」「感じる」がキーワードになっていた。

3. クラスター解析

似たような話題(トピック)を挙げているクラスターに対象者を分ける解析を行った結果、20クラスターが生成された。このうちクラスターサイズの大きい順に上位6位までのクラスター(クラスター44、クラスター42、クラスター40、クラスター20、クラスター00、クラスター04)に注目して結果をみてる。表2は、各クラスターを構成する単語を示したものである。クラスター44(56度数; 13.93%)の特徴的な単語は、出現率の高い順に「自分」(17.86%)、「感じる」(16.07%)、「できる」(12.5%)、「聞く」(12.5%)、「声」(10.71%)、「教師」(10.71%)、「考える」(10.71%)等であった。

クラスター42(43度数; 10.7%)の特徴的な単語は、「思う」が100.0%ですべての文章に含まれていた。次いで「考える」(30.23%)、「性」(25.58%)、「言う」(16.28%)、「分かる」(16.28%)、「自分」(13.95%)等が続いた。

クラスター40(40度数; 9.95%)の特徴的な単語は、「思う」と「授業」がともに100.0%ですべての文章に含まれていた。次に高かったのは、「生徒」(67.5%)、「教師」(37.5%)、「する」(35.0%)、「言う」(27.5%)、「私」(22.5%)等であった。

クラスター20(39度数; 9.7%)の特徴的な単語は、「思う」(100.0%)、「生徒」(100.0%)がすべての文章に含まれていた。次いで「考える」(20.51%)、「言う」(20.51%)、「性」(17.95%)、「意見」(17.95%)、「教師」(17.95%)、「発表する」(15.38%)等であった。

クラスター00(38度数; 9.45%)の特徴的な単語は、「生徒」が100.0%ですべての文章に含まれていた。次いで高かったのは、「感じる」(36.84%)、「意見」(34.21%)、「教師」(28.95%)、「する」(18.42%)、「反応」(18.42%)、「発問」(18.42%)等であった。

クラスター04(36度数; 8.96%)の特徴的な単語は、「授業」が100.0%ですべての文章に含まれていた。以下「参観する」(33.33%)、「教師」(33.33%)、「なる」(22.22%)、「学ぶ」(22.22%)、「できる」(19.44%)、「勉強」(13.89%)等が続いた。

4. クラスター散布図と各クラスターの係り先分析

TMCでは、クラスターリングの手法としてKohonenネットワーク⁸⁾を行うが、ここでは上位6位の生成クラスターと記述された学生の文章構成との関係を散布図に示した。図3は、表示された散布図と、各クラスター内の単語と単語の係り先分析(単語と単

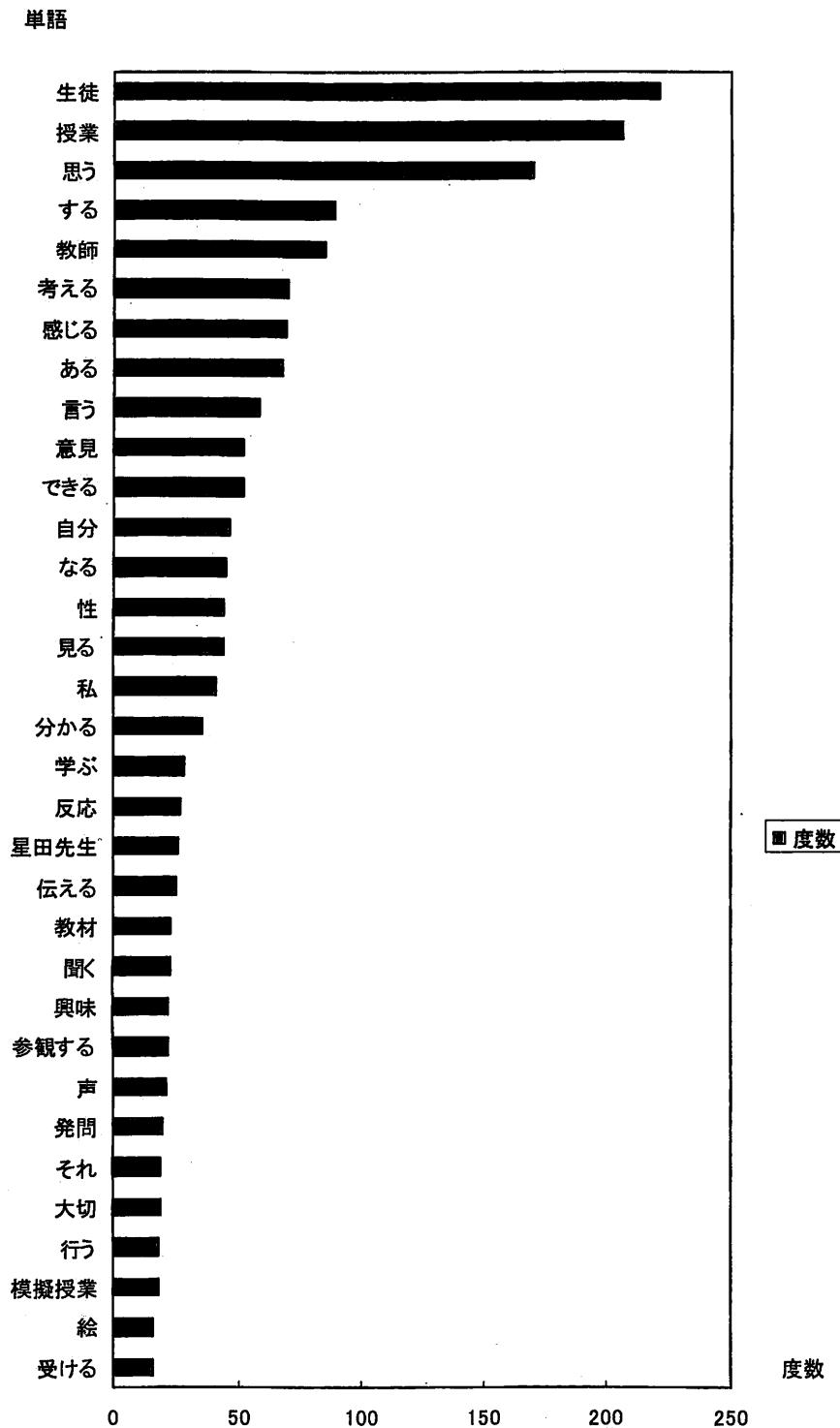


図2 出現頻度の高い変換後主要後

語の関係や関係の強弱～線の太さで表示) を示したものである。

クラスター44は、変換後主要語の「見る」「考える」「学ぶ」が係り先主要語「こと」に結びつき、同様に「立つ」と「授業」, 「教師」と「声」, 「声」と「大きさ」が結びついていた。とりわけ共起頻度の高いもの(線の太いもの)は、「考える」と「こと」, 「声」と「大きさ」であった。

クラスター42は、変換後主要語と係り先主要語の関係を見ると「言う」と「こと」, 「自分」と「性」, 「考える」と「ところ」等が結びついていた。共起頻度の高いものは「言う」と「こと」, 「自分」と「性」であった。

クラスター40は、共起頻度の高いものをみると「言う」と「こと」, 「授業」と「する」, 「する」と「思う」, 「授業」と「行う」であった。とりわけ変

表2 各クラスターを構成する単語

クラスター44 ; 56(13.93)		クラスター42 ; 43(10.70)		クラスター40 ; 40(9.95)		クラスター20 ; 39(9.70)		クラスター00 ; 38(9.45)		クラスター04 ; 36(8.96)	
単語	%	単語	%	単語	%	単語	%	単語	%	単語	%
自分	17.86	思う	100.00	思う	100.0	思う	100.00	生徒	100.00	授業	100.00
感じる	16.07	考える	30.23	授業	100.0	生徒	100.00	感じる	36.84	参観する	33.33
できる	12.50	性	25.58	生徒	67.5	考える	20.51	意見	34.21	教師	33.33
聞く	12.50	言う	16.28	教師	37.5	言う	20.51	教師	28.95	なる	22.22
声	10.71	分かる	16.28	する	35.0	性	17.95	する	18.42	学ぶ	22.22
教師	10.71	自分	13.95	言う	27.5	意見	17.95	反応	18.42	できる	19.44
考える	10.71	それ	11.63	私	22.5	教師	17.95	発問	18.42	勉強	13.89
見る	10.71	意見	11.63	できる	17.5	発表する	15.38	見る	15.79	星田先生	11.11
なる	8.93	見る	11.63	行う	17.5	する	12.82	言う	13.16	見る	11.11
中学生	7.14	性情報	9.30	ある	15.0	できる	12.82	分かる	13.16	私	8.33
学ぶ	7.14	グループ	6.98	反応	15.0	絵	12.82	なる	10.53	話す	8.33
教材	7.14	中学生	6.98	自分	15.0	自分	10.26	考える	10.53	分かる	5.56
書く	7.14	何	6.98	受ける	12.5	見る	10.26	自分	10.53	伝える	5.56
黒板	7.14	情報	6.98	大切	12.5	分かる	10.26	勉強	7.89	声	5.56
反応	5.36	教師	6.98	感じる	12.5	なる	7.69	性	7.89	教材	5.56
星田先生	5.36	教材	6.98	意見	10.0	フラッシュカード	7.69	星田先生	7.89	発問	5.56
発問	5.36	異性	6.98	なる	7.5	伝える	7.69	私	7.89	自分	5.56
私	5.36	私	6.98	分かる	7.5	私	7.69	出す	5.26	行う	5.56
いる	3.57	いる	4.65	参観する	7.5	聞く	7.69	向き合う	5.26	言う	5.56
それ	3.57	する	4.65	声	7.5	興味	7.69	大切	5.26		
分かる	3.57	できる	4.65	学ぶ	7.5	伝わる	5.13	聞く	5.26		
フラッシュカード	3.57	なる	4.65	星田先生	7.5	出す	5.13	部分	5.26		
伝える	3.57	内容	4.65	見る	7.5	声	5.13	雰囲気	5.26		
伝わる	3.57	声	4.65	いる	5.0	学ぶ	5.13				
単元	3.57	大切	4.65	つける	5.0	持つ	5.13				
向き合う	3.57	学ぶ	4.65	クラス	5.0	教材	5.13				
大切	3.57	授業	4.65	伝える	5.0	星田先生	5.13				
模擬授業	3.57	書く	4.65	何	5.0	書く	5.13				
異性	3.57	気持ち	4.65	場面	5.0	黒板	5.13				
目	3.57	理解する	4.65	態度	5.0						
立つ	3.57	発問	4.65	発表する	5.0						
		知識	4.65	知識	5.0						
		聞く	4.65	考える	5.0						
				話す	5.0						
				部分	5.0						

換後主要語の「授業」が「する」「できる」「受ける」「思う」「行う」の5つの係り先主要語と結びついていた。

クラスター20は、共起頻度の高いものをみると、「言う」と「こと」、「生徒」と「考える」、「できる」と「思う」、「自分」と「意見」であった。語と語の結びつきは、複雑になっており、とりわけ係り先主要語の「思う」は、変換後主要語「言う」「見る」「考える」「絵」「発表する」「生徒」「できる」と多くの語と結びついていた。

クラスター00は、共起頻度の高いものをみると、「生徒」と「反応」、「生徒」と「意見」が目立った。係り先分析では、変換後主要語「生徒」が係り先主要語「一人」「一人一人」「反応」「実感」「意見」「楽しむ」「言う」に結びついていた。

最後にクラスター04は、変換後主要語「星田先生」と「教師」が係り先主要語「授業」と結びつき、同様に「授業」と「参観する」、「学ぶ」と「こと」、「勉強」と「なる」が結びついていた。共起頻度をみると「授業」と「参観する」が太い線で結びついていた。

5. 各クラスターの命名

散布図に表示された6つのクラスターを構成する特徴的な単語と係り先分析の結果および共起頻度の結果をもとに、各クラスターのカテゴリー名を命名した(表3)。

クラスター44は、カテゴリー名を「授業との対面」とし、「自分」(17.86%)、「感じる」(16.07%)、「声」(10.71%)、「教師」(10.71%)、「中学生」(7.14%)、「学ぶ」(7.14%)、「教材」(7.14%)、「書く」(7.14%)、「黒板」(7.14%)等の単語からサブカテゴリー名は「初めて参観する授業への感銘」とした。クラスター42は、同様に「授業の山場」とし、「思う」(100.0%)、「考える」(30.23%)、「性」(25.58%)、「自分」(13.95%)、「意見」(11.63%)、「性情報」(9.3%)、「グループ」(6.98%)、「教師」(6.98%)、「教材」(6.98%)、「異性」(6.98%)等の単語から、「性を自分のこととして考える」とした。クラスター40は、「学生と『授業をすること』」とし、「思う」(100.0%)、「授業」(100.0%)、「生徒」(67.5%)、「教師」(37.5%)、「私」(22.5%)、「行う」(17.5%)、「声」(7.5%)、「学ぶ」(7.5%)等の単語から「学生が『自分が教師として授業をする』という課題に対峙して思うこと」とした。クラスター20は「授業における生徒と教師」とし、「思う」(100.0%)、「生徒」(100.0%)、「考える」(20.5%)、「性」(17.95%)、

「意見」(17.95%)、「教師」(17.95%)、「発表する」(15.38%)、「絵」(12.82%)等の単語から「生徒が性を考えるきっかけ(絵)を創造する教師と生徒の意見の発表」とした。クラスター00は「授業の構成」とし、「生徒」(100.0%)、「意見」(34.21%)、「反応」(18.42%)、「発問」(18.42%)、「分かる」(13.16%)、「性」(7.89%)、「向き合う」(5.26%)、「大切」(5.26%)、「雰囲気」(5.26%)等の単語から「生徒が考える発問の仕方と生徒一人ひとりの意見の尊重」とした。クラスター04は「授業参観の学び」とし、「授業」(100.0%)、「参観する」(33.33%)、「教師」(33.33%)、「学ぶ」(22.22%)、「勉強」(13.89%)、「星田先生」(11.11%)、「話す」(8.33%)、「分かる」(5.56%)、「伝える」(5.56%)、「声」(5.56%)、「教材」(5.56%)、「発問」(5.56%)、「行う」(5.56%)等の単語から「星田先生(教師)の授業を参観することで学ぶ(勉強すること)」とした。

考 察

1. 感想文から捉えられる学生の学び

本研究は、本年度試みた中学校保健体育科の授業参観を通して学生が「教師(授業者)の教育実践から何をどう学びとったのか⁹⁾」を感想文を分析することで明らかにするものである。樋口¹⁰⁾は、見学実習について次のように述べている。「見学実習においては、指導教諭や実習教科・学年を担当する教師の授業を見学することが主となるが、そこでは内容とともに、教師が1時間の授業の中でどのように行動しているかを見ると参考になる。例えば、教室のどこに立っているか、どこを見ているか、説明以外にどのような行動を行っているか、どのような教材を用いるのか等についてである。すぐれた教師ほど実践は変化に富んでいるはずであり、これらの特徴を記録し、実習生の授業に取り入れるとよい。」学生が、授業参観に先立って示した授業の観察のポイントを押さえた観察を行っているか、また全体的に星田氏の授業から何を学んだのかを結果から考察する。

学生が記述した感想文は一人平均13.71文であり、ほぼB5用紙全面に記述されていた。出現頻度の高い変換後主要語をみると、名詞では「生徒」「授業」「教師」「意見」の出現率が高く、以下「自分」「性」「私」「反応」「教材」「興味」「声」「発問」と続いている。これらは、授業を構成する重要な要素と一致すると思われる。動詞では「思う」「考える」「感じる」「できる」「見る」「分かる」「学ぶ」等が挙げられ、学生が授業参観を通して思考したり、理

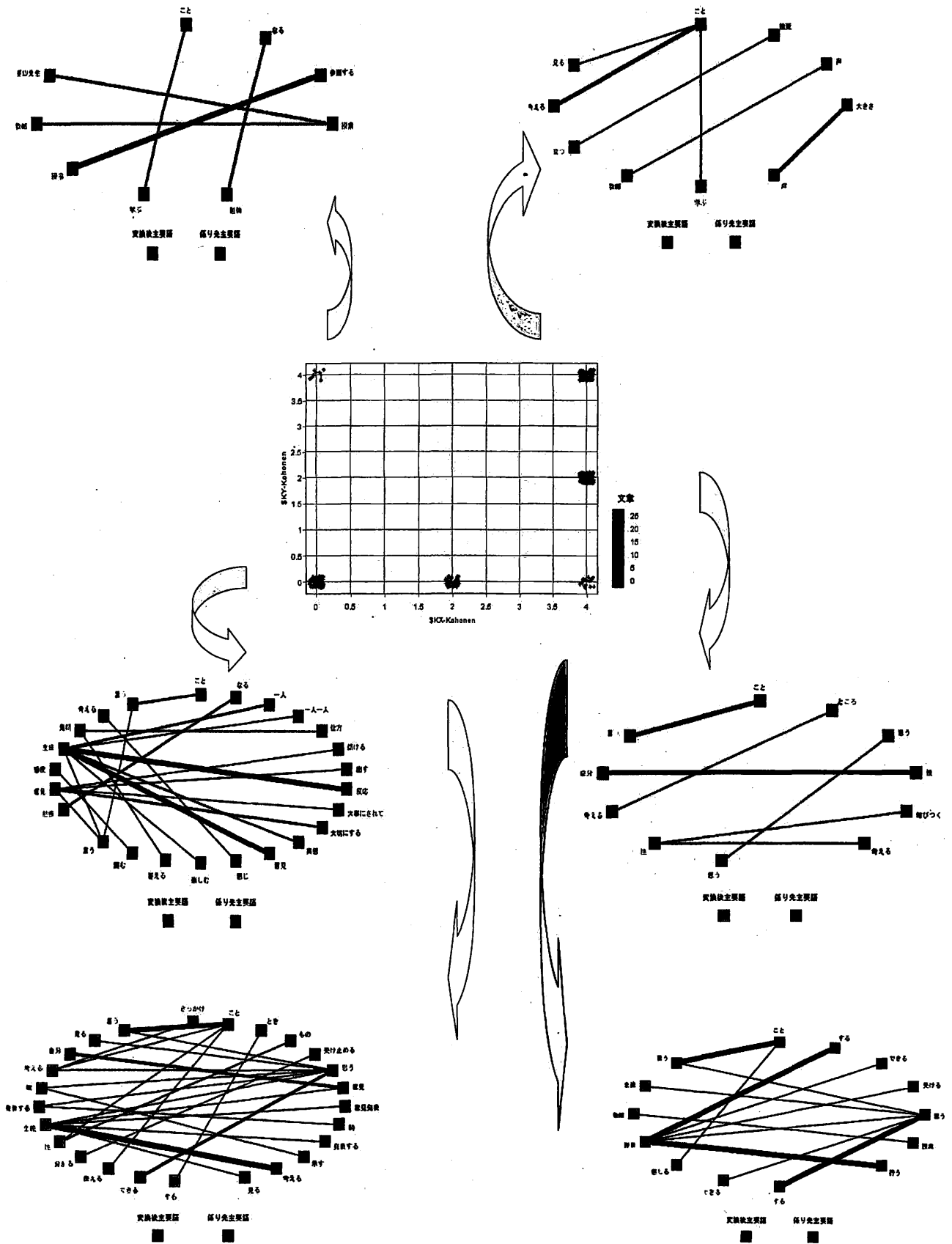


図3 クラスターの散布図と各クラスターの係り先分析

表3 各クラスターの命名

クラスター値	カテゴリー名	サブカテゴリー名
44	授業との対面	初めて参観する授業への感銘
42	授業の山場	性を自分のこととして考える
40	学生と「授業をすること」	学生が「自分が教師として授業をする」という課題に対峙して思うこと
20	授業における生徒と教師	生徒が性を考えるきっかけ（絵）を創造する教師と生徒の意見の発表
00	授業の構成	生徒が考える発問の仕方と生徒一人ひとりの意見の尊重
04	授業参観の学び	星田先生（教師）の授業を参観することで学ぶ（勉強する）こと

解したり、納得したり、学ぶ様子が捉えられると思われる。

次にクラスター分析で得られた主要6クラスターについて、前もって伝えてあった授業観察のポイントを各クラスターを構成する単語の中で検証すると、「声の大きさ・話す速さ」「発問の仕方」「教材の活用・提示の仕方」については比較的関連する語がみられたが、「立つ位置・姿勢」「表情・視線の在り方」に関連する語は少ないことが捉えられた。前3者は初めての授業参観で学生が観察しうる観点といえ、後の2者は、授業参観の回数を積むとともに視点の幅が広がっていき観察しうる観点と思われる。授業参観の機会を増したり、ビデオに撮影して視聴し、前回観察しきれなかったところをチェックするなどの工夫が必要と思われる。次に各クラスターに命名して得られたカテゴリー名から学生の学びのプロセスを捉えることとする。

上野¹⁴⁾は、教育実習を終えた学生に実習中にどのような視点で授業や保育を観察したか想起してもらい、大きく4つ～A子どもの姿をとらえたもの B保育者・教師の姿をとらえたもの Cどちらの要素をも含むもの（教師の働きかけと、それに応じた子どもの変化） D観察者が考えたこと～の観点を見出した。この観点を参考にして、得られたクラスターをみてみると、クラスター42「授業の山場」—「性を自分のこととして考える」は、A子どもの姿をとらえたものに該当し、クラスター00「授業の構成」—「生徒が考える発問の仕方と生徒一人ひとりの意見の尊重」はB教師の姿をとらえたものに該当すると思われる。またクラスター20「授業における生徒と教師」—「生徒が性を考えるきっかけ（絵）を創造する教師と生徒の意見の発表」はCどちらの要素をも含むもの（教師の働きかけと、それに応じた子どもの変化）に該当すると思われる。さらにク

ラスター40「学生と『授業をすること』」—「学生が「自分が教師として授業をする」という課題に対峙して思うこと」とクラスター04「授業参観の学び」—「星田先生（教師）の授業を参観することで学ぶ（勉強する）こと」はD観察者が考えたことに該当すると思われる。なお、クラスター44「授業との対面」—「始めて参観する授業への感銘」は、授業が教師の力量の中核をなす¹²⁾ものであり、教師にとっていかに大切に重みを持ったものであるか¹³⁾を学校の教室で教師の働きかけと生徒の様子を間近に見るといふ教育実践との対面を示していると思われる。

これらのクラスターを散布図（図3）で感想文の書き始めから結びまでの文章の構成と対比してみると、クラスター44—クラスター42—クラスター00—クラスター20—クラスター40—クラスター04の流れでほぼ一致していることが捉えられた。学生の感想文を通して捉えられた授業参観での学びは、〔授業との対面—子どもの姿をとらえる—教師の姿をとらえる—教師の働きかけとそれに応じた子どもの変化をとらえる—学生が考えたこと〕のプロセスが捉えられた。学生は、50分の授業の中で、初めて見る中学生、授業の感動とともに性を自分のこととして受け止めたり、考える生徒の姿や反応を捉えたり、教師の発問の仕方や、生徒一人一人の意見を尊重する教室の雰囲気を感じ取っていた。そして、授業参観を通して、間近に迫った課題である、学生自らが「授業をする」ということを考えて、星田氏の授業から「声」や「教材」「発問」などを食欲に学びとろうとする学生の学びの中身を捉えることができたと思われる。

2. 養護実習事前指導における教科教育に関わる指導の今後の課題

学生は、別科入学後医療・看護の領域から、教育学の学問領域に一步を踏み出して、前期に一般教養・教職教養・養護専門科目を学ぶ。教育学の基礎を学ぶとともに専門領域の保健科教育の理論・技術を学ぶ。四年制課程において実施されている段階的な養護実習¹⁴⁾を、別科では実習前の4ヶ月で凝縮して学ばなくてはならない。とりわけ授業に関する知識・技術の習得は学生にとって大きな課題となっている¹⁵⁾。

別科では昨年まで大学の講義の中で取り扱う模擬授業の演習の他に附属中学校での授業実践実習を行っていた。大学で学生を子どもに見立てて行う模擬授業ではなく、中学生を前に直に授業をすることで、生徒の反応は予測がつかないことや、発問の難しさ、授業展開の困難さなど多くのことを体験的に学び、学習効果の高い事前指導であった。本年は、学生自らが授業者としての実習をする前に、現場の教師が行う授業を見学する観察実習を組み込んだ。教育実習の事前指導は、かぎられた期間で実施される教育実習の効率化、円滑化を図ることを基本的な目標とする¹⁶⁾ものである。授業に関する学習は、大学での学びだけでは不十分であり、観察や参加型の実習をできるだけ組み込むことが重要である。今回の授業参観を通して学生の学びのプロセスが明確になるなど一定の成果を確認できた。今後さらに発展させていくためには、授業参観の機会を増やしたり、授業参観後の授業研究会を設けたり、授業を観察するポイントの指導等工夫・改善が必要と思われる。本別科は、時間的制約がある中で、学生がより効果的に養護実習を履修し、授業を実践する能力を身につけていくために、実習の事前指導の工夫・改善を今後も続けていかなければならない。

まとめ

養護実習の事前指導の一環として、附属中学校での保健体育科の授業参観を試みた。そこでの学生の学びを参観後に自由記述された感想文をテキストマイニングの手法を用いて内容分析することで捉えた。その結果、学生の学びは、〔授業との対面—子どもの姿をとらえる—教師の姿をとらえる—教師の働きかけとそれに応じた子どもの変化をとらえる—学生が考えたこと〕のプロセスで記述されていることが捉えられた。今後は、学習指導案と授業構成や教師の働きかけに対する生徒の詳細な反応の分析など、授業観察記録の内容分析につなげていきたい。また、養護実習の事前指導をさらに充実し、効果的なもの

にするために、別科のカリキュラムを検討するとともに授業参観の機会を増やしたり、参観後の授業研究会を設けるなどの工夫・改善が必要と思われた。

謝 辞

本別科学生に授業参観の機会を与えてくださいました熊本大学教育学部附属中学校の高木信之校長先生はじめ教職員の皆様に深く感謝申し上げます。また、授業者として授業を公開してくださいました星田正治先生に心より感謝するとともに、1年3組の生徒の皆様にも感謝申し上げます。また、感想文の分析にご協力くださいました平成17年度別科入学生31名に心より感謝申し上げます。最後に、研究協力者の山田美菜さん、吉森旭希さん、渡章子さんに感謝申し上げます。

文 献

- 1) 日本教育大学協会全国養護部門研究委員会：21世紀における養護教諭養成教育のあり方に関する報告書，42，1997
- 2) 市川須美子・浦野東洋一・小野田正利他編：教育小六法，588-589，学陽書房，東京，2004
- 3) 齊藤ふくみ・谷崎勝弘・久保明博他：中学校一日訪問実習での保健指導体験における学生の学び—養護教諭特別別科生の感想文の分析から—，熊本大学教育実践研究，21，113-120，2004
- 4) 前掲書3)，113
- 5) 岩本俊郎・浪本勝年編：教育実習を考える，51，北樹出版，東京，2003
- 6) 齊藤ふくみ・宮腰由紀子・赤星有加他：養護実習終了後における感想文の内容分析の試み—養護教諭特別別科生を対象として—，熊本大学教育学部紀要，人文科学，54，203-210，2005
- 7) 内田治：例解データマイニング入門，197，日本経済新聞社，東京，2002
- 8) 牛田一雄・高井勉・木暮大輔：SPSSクレメンタインによるデータマイニング，149，東京図書，東京，2003
- 9) 有吉英樹・長澤憲保編：教育実習の新たな展開，98，ミネルヴァ書房，京都，2001
- 10) 前掲書5)，51
- 11) 前掲書9)，52-53
- 12) 天笠茂：第一部若い教師の成長とその条件（小島弘道編：教育改革を実践する日本の若い教師2若い教師の力量形成），2，エイデル研究社，東京，1987
- 13) 細見昇：第6章授業実習の実際（高木良伸編：教育実習要論），137，健帛社，東京，1988
- 14) 熊本大学教育学部養護教諭養成課程カリキュラム研究会（代表 松田芳子）：養護実習の効果的な実施方式に関する研究—段階的な養護実習を通して—，2000
- 15) 齊藤ふくみ・宮腰由紀子・津島ひろ江・藤井宝恵：養護実習記録簿の内容分析から捉えられる学生の学びの

構成—養護教諭特別科学生を対象として—, 日本養
護教諭教育学会誌, 9(1), 48-60, 2006

16) 前掲書9), 41